
土地分類基本調査

野 辺 地

5 万分の 1

国 土 調 査

青 森 県

1 9 8 9

序 文

都道府県土地分類基本調査は、限りある国土の適正な利用、解説および保全に資することを目的として国土調査法に基づき実施しているものです。

その内容は、国土地理院発行の5万分の1の地形図をベースに、地形、表層地質、土壌、土地利用現況等の土地の属性を統一的に整理した資料に基づき調査を行い、土地を客観的かつ総合的に把握するものです。

本県では、昭和40年3月に経済企画庁「八戸」図幅が発行されて以来、県内43図幅のうち本冊子で18図幅を完成させることができました。

これらの成果が、今後の有効適切な土地利用のために、広く各界各層において利用されることを望みます。

この調査の実施に際し、御指導と御協力をいただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

平成2年3月

青森県農林部長

本 儀 隆

調査担当者一覧表

総合・企画指導	国土庁土地局国土調査課		
総括	青森県農林部土地改良第一課		
地形分類調査	弘前大学教育学部	教授	水野 裕
	八戸工業高等専門学校	教授	堀田 報誠
表層地質調査	弘前大学教育学部	教授	岩井 武彦
土 壌 調 査			
山地丘陵地の土壌（林地）			
	青森営林局盛岡営林署	連絡室次長	松尾 弘
	青森県林業試験場	研究管理員	岩村 良男
台地及び低地の土壌（農用地）			
	青森県農業試験場	次長	相馬 駿春
	〃	化学部長	鎌田 健造
土地利用現況調査	青森県農林部土地改良第一課	主幹	佐藤 春夫

目 次

序 文

総 論

I 位置及び行政区画	1
II 地域の特性	4
1. 地勢・気候	4
2. 人口と世帯数	6
3. 交 通	7
4. 産 業	8

各 論

I 地形分類図	13
1. 地形概説	13
2. 地形細説	13
II 表層地質図	18
1. 地質概説	18
2. 表層地質細説	19
III 土壤図	27
1. 土壤分類の細説	27
(1) 山地及び丘陵地の林地土壤	27
(2) 台地及び低地の農用地土壤	29
IV 土地利用現況図	34

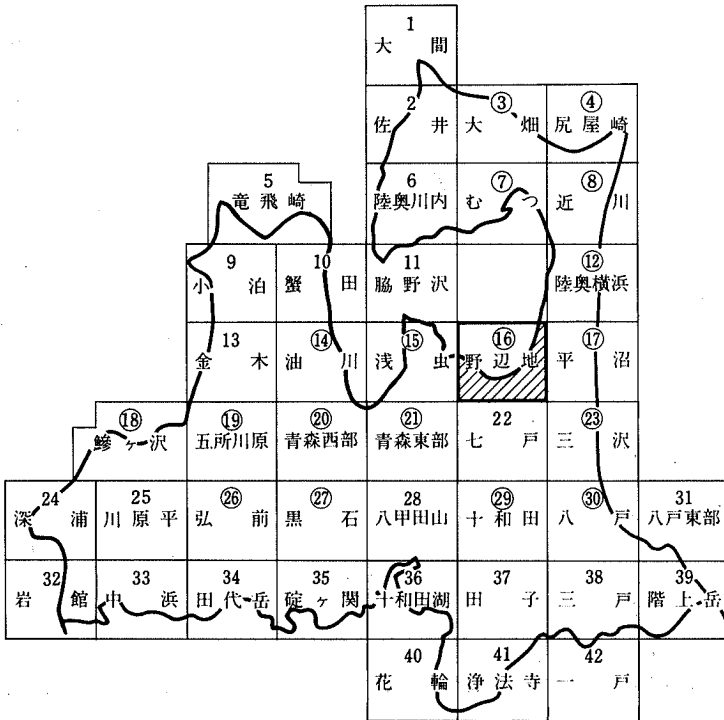
總論

I 位置及び行政区画

1. 位置

「野辺地」図幅は青森県の北東部に位置し、東経 141° 00' ~ 141° 15'、北緯 40° 50' ~ 41° 00' の範囲内にあり、図幅内調査面積は184.60km²である。

第1図 位置図



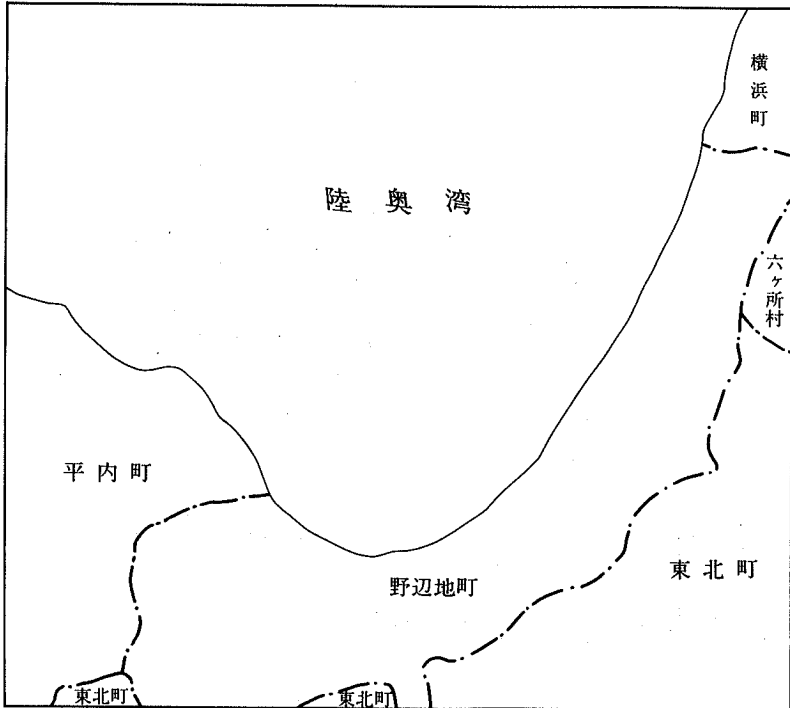
注) ○印は印刷発行済図幅である。

2. 行政区画

本図幅内の行政区画は平内町、野辺地町、横浜町、東北町および六ヶ所村の4町1村からなっており、その展開は第2図のとおりである。

この図幅に占める5町村面積の割合は、第1表に示すように当該町村全体面積の20.8%である。

第2図 行政区域図



第1表 市町村別面積

(単位：km²：%)

区分 市町村	全体面積		図幅内面積		占有率 $\frac{B}{A}$
	面積(A)	比率	面積(B)	比率	
平内町	215.98	24.3	49.39	26.8	22.9
野辺地町	82.66	9.3	79.89	43.2	96.6
横浜町	125.83	14.2	2.52	1.4	2.0
東北町	209.72	23.6	47.06	25.5	22.4
六ヶ所村	253.35	28.6	5.74	3.1	2.3
計	887.54	100.0	184.60	100.0	20.8

表は、建設省国土地理院「昭和62年全国都道府県市町村別面積調」

(昭和62年10月1日現在)

図幅内の市町村別面積は、5万分の1地形図をプランメーターにより計測したものである。

II 地域の特徴

1. 地勢・気候

(1) 地勢

この地域は青森県の北東部に位置し下北半島と夏泊半島に挟まれた位置にあり、北側は陸奥湾に面し、南側には八甲田連峰を背負う形となっている。

図幅内の調査地域は西部にわずか山地がみられる程度で、台地が広い面積を占め平地はさほど多くはない。

地域内を流れる主な河川には野辺地川、清水川、堀差川などがあるが、いずれも2級河川で流域が狭く、洪水時の河床変動の起きやすい小河川である。

(2) 気候

この地域の気候は一般に冷涼で、農耕期に入った5月中旬においても昼夜の寒暖差が激しく、しばしば晩霜が発生するなど農作物に被害を与えている。

また、夏期に「ヤマセ」（偏東風）が吹きつけることが多く作物の育成に少なからぬ被害を及ぼしている。

なお、この地域の気象は日本海型の気候となっているため、冬期における降雪量が多く青森市に次ぐ豪雪地帯となっている。

月別気象表

第2表

野辺地地域気象台観測所

区分	月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
日最高気温高い(°C)		11.0 (54)	13.8 (57)	15.1 (57)	25.8 (62)	28.9 (55)	33.3 (62)	31.5 (60)	34.2 (60)	32.0 (60)	25.0 (60)	19.6 (55)	14.1 (57)	昭和54年 ~昭和62年
日最高気温低い(°C)		-7.7 (61)	-6.4 (59)	-3.2 (55)	0.7 (55)	5.4 (54)	10.9 (57)	12.4 (61)	15.7 (55)	14.6 (62)	5.2 (59)	-1.7 (56)	-7.1 (59)	"
日最低気温高い(°C)		4.3 (58)	1.5 (62)	3.5 (57)	12.6 (58)	13.6 (57)	18.7 (54)	22.6 (62)	22.8 (58)	22.5 (60)	15.6 (60)	12.6 (60)	5.9 (55)	"
日最低気温低い(°C)		12.4 (55)	-12.6 (55)	-12.1 (61)	-7.6 (59)	-2.4 (82)	1.7 (60)	9.2 (54)	10.9 (54)	5.5 (58)	0.1 (61)	-6.1 (57)	-10.6 (59)	"
月平均気温高い(°C)		-0.7 (58)	-0.6 (54)	1.7 (57)	9.8 (58)	13.0 (58)	17.7 (55)	20.9 (59)	24.0 (60)	18.3 (61)	13.6 (54)	7.1 (55)	2.8 (54)	"
月平均気温低い(°C)		-4.5 (60)	-3.4 (61)	-0.8 (59)	3.5 (59)	9.6 (59)	13.0 (58)	16.7 (61)	17.6 (55)	16.1 (56)	10.2 (58)	3.2 (56)	-0.8 (60)	"
月平均気温(°C)		-2.4	-2.2	-0.8	6.6	11.7	15.5	19.2	21.4	17.4	11.7	5.5	0.9	"
1時間降水量(mm)		8 (56)	5 (61)	7 (54)	15 (66)	10 (59)	11 (55)	24 (59)	24 (54)	20 (54)	39 (54)	8 (61)	8 (62)	"
日降水量(mm)		49 (55)	35 (60)	35 (57)	66 (56)	99 (57)	57 (58)	61 (61)	134 (56)	70 (56)	74 (55)	43 (54)	34 (62)	"
月降水量多い(mm)		169 (54)	158 (58)	113 (59)	165 (57)	285 (57)	163 (58)	234 (59)	380 (56)	207 (54)	220 (54)	184 (60)	148 (59)	"
月降水量少ない(mm)		68 (59)	62 (55)	37 (55)	30 (62)	51 (55)	40 (60)	44 (57)	70 (59)	90 (62)	58 (62)	52 (59)	73 (61)	"
日最大風速風向(m/s)		9W (58)	10W (54)	15X (54)	12W (62)	12W (58)	6WSW (57)	6W (60)	8X (56)	9W (57)	9W (57)	10 W (62)	11W (61)	"
月最深積雪(cm)		125 (42)	150 (39)	138 (56)	73 (40)							58 (50)	77 (57)	昭和39年 ~昭和57年

() は発生年次

2. 人口・世帯数

図幅内5町1村の昭和50年から60年までの国勢調査による人口動態は、この10年間で1,121人、およそ1.7%の減となっている。しかし世帯数では逆に1,749世帯、10.9%が増加しており、1世帯当たりでは3.66人と県内平均の3.43人に比べ0.23人が多い。地域別にみると横浜町、東北町、六ヶ所村の2町1村が減少し、野辺地町と平内町がそれぞれ2%と0.4%の微増となっているが、この5年間の動向をみると全般的に減少傾向にあることは否めない。

野辺地町についていえば、この地は藩政時代から物資流通の交易港として栄えてきた歴史があるものの、現今の高速交通体系のもとではその面影をしのばせるほどのものもなく、現在は周辺生産地の流通基地として公共施設の整備を図るなど、町の人口減少に対策を講じている。

また、平内町はほたて栽培漁業の振興等が、出稼ぎによる県外への人口流出に歯止めをかける効果の現れとなっている。

第3表 市町村別人口と世帯数

(単位：人、世帯)

市町村	区 分	年別	昭和50年	昭和55年	昭和60年	C —×100 A %	1世帯当りの平均人員		昭和60年 1km ² 当り 人口密度
			国勢調査	国勢調査	国勢調査		50年	60年	
			(A)	(B)	(C)				
平内町	人口		17,175	17,501	17,246	100.4			
	世帯数		3,982	4,255	4,345	109.1	4.31	3.97	79.85
野辺地町	人口		17,992	18,419	18,351	102.0			
	世帯数		5,028	5,494	5,722	113.8	3.58	3.21	222.01
横浜町	人口		7,047	6,590	6,626	94.0			
	世帯数		1,644	1,708	1,835	111.6	4.29	3.61	52.66
東北町	人口		12,607	12,114	11,797	93.6			
	世帯数		2,823	2,883	2,969	105.2	4.47	3.97	56.25
六ヶ所村	人口		11,321	11,104	11,003	97.2			
	世帯数		2,520	2,879	2,875	114.1	4.49	3.83	43.43
計	人口		66,144	65,728	65,023	98.3			
	世帯数		15,997	17,219	17,746	110.9	4.13	3.66	73.26

国勢調査

3. 交通

この地域における交通体系は、第3図に示すとおりであるが、鉄道においては図幅内を斜走するJR東北本線からJR大湊ローカル線が分岐され、下北地域と県中核部を結ぶ重要な交通ルートとなっている。

これらの鉄道と併行して走っている国道4号線、国道279号線はともに物資流通の大動脈として年々その交通量が増えている。一方、海路では、昭和44年年開設した野辺地、函館間のカーフェリーが、その後東北縦貫自動車道路の開通に伴い、利用台数に目減りが生じ現在はおもに八戸港、青森港のサブ的ルートとして繁忙期の役割を担っている。

第3図 主要交通体系図



4. 産業

5市町村の産業別就業人口は昭和55年の国勢調査時点より昭和60年までに、全体で105人、およそ0.35%が減っている。これを産業別にみると第1次産業が714人（6.3%）減少、それに対し第2次産業では43人（0.6%）増加し、また第3次産業では566人（4.9%）の増となっており、農家人口の減少がこの地域でも目立った統計値を示している。

（農業）

この地域の農業は、水稻作付積が3,254ha、普通畑作付面積が5,115haと普通畑の作付面積が多く、その主要作物は市場性の高い換金作物の長いも、大根、ニンジン、ゴボウなどとなっている。

（漁業）

陸奥湾沿岸に面する平内町は、海岸線が48kmもあることから栽培漁業が盛んである。なかでも、ホタテ貝は町の漁獲金額の約95%に当たり水産加工も含め100億円産業ともいわれ、本県のホタテ養殖の水揚げ高の半分を占める勢いとなっている。

また、野辺地町、横浜町においても漁獲金額のおよそ85%がホタテ貝によるものでこの地域ではナマコ、ホヤ、カレイなどを含め、沿岸栽培漁業の研究開発に力を入れ漁業生産の拡大と安定した漁業基盤の整備に励んでいる。

第4表 産業別就業人口

(単位：人)

区分	第1次産業		第2次産業		第3次産業				
	農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	計	
市町村	(8,312)	(1,026)	(123)	(1,848)	(2,997)	(4)	(1,471)	(722)	(2,197)
平内町	8,297	981	104	1,916	3,001	8	1,166	945	2,119
野辺地町	(7,753)	(494)	(156)	(701)	(1,351)	(2)	(1,316)	(624)	(1,942)
7,849	500	112	615	1,227	2	1,366	671	2,039	4,583
横浜町	(2,903)	(876)	(109)	(246)	(1,231)	(8)	(545)	(212)	(765)
3,081	1,018	84	271	1,373	13	537	226	776	928
東北町	(6,123)	(3,302)	(98)	(70)	(3,470)	(0)	(682)	(211)	(893)
5,930	3,037	72	37	3,146	—	631	333	964	1,819
六ヶ所村	(4,829)	(1,706)	(40)	(573)	(2,319)	(1)	(934)	(150)	(1,085)
4,658	1,385	33	489	1,907	5	818	204	1,027	1,712
計	(29,920)	(7,404)	(526)	(3,438)	(11,368)	(15)	(4,948)	(1,919)	(6,882)
([100])	([38.0])	([35.7])	([28])	([23.0])	([23.2])	([28])	([23.0])	([23.0])	([23.0])
29,815	6,921	405	3,328	10,654	28	4,518	2,379	6,925	12,215
([100])									([41.0])

昭和60年「国勢調査」による。()内数字は昭和55年国勢調査 ()内数字は構成比
 総数には「分数不能」の産業を含めた。

第5表 市町村別産業別純生産

(単位:百万円、%)

区分 市町村	生産所得	第1次産業				第2次産業				第3次産業
		農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	計	
平内町	(100)				(23.8)				(17.8)	(58.4)
	19,949	1,191	123	3,434	4,748	510	1,432	1,617	3,559	11,642
野辺地町	(100)				(6.8)				(14.7)	(78.5)
	22,735	740	198	610	1,548	161	2,023	1,212	3,346	17,841
横浜町	(100)				(32.7)				(19.4)	(47.9)
	6,569	1,286	85	776	2,146	327	536	411	1,274	3,149
東北町	(100)				(42.8)				(16.2)	(41.0)
	17,012	4,294	198	2,793	7,285	8	1,783	967	2,758	6,970
六ヶ所村	(100)				(20.2)				(33.5)	(46.3)
	17,957	2,119	111	1,403	3,633	283	5,342	381	6,005	8,319
計	(100)				(23.0)				(20.1)	(56.9)
	84,222	9,630	715	9,016	19,360	1,189	11,116	4,638	16,942	47,921

青森県企画部統計課「平成元年3月刊市町村民所得統計」()内数字は構成比
注. 区分の計は、四捨五入の関係で合致していないものもある。

第6表 製造業と商業

区分 市町村	製造業(63.12)			商業(63.6)		
	事業所数	従業員数	出荷額	商店数	従業員数	年間販売額
平内町	33	人 698	万円 70,814	239	人 662	万円 709,119
野辺地町	40	621	706,441	356	1,553	2,155,648
横浜町	9	212	129,590	110	331	541,983
東北町	12	323	207,257	182	576	903,415
六ヶ所村	4	111	74,127	178	546	1,535,356
計	98	1,965	1,821,224	1,065	3,668	5,845,521

青森県企画部統計課「昭和62年青森県の工業」、「昭和63年青森県の商業」

第7表 農業粗生産額（昭和62年）

（単位：百万円、％）

区分 市町村	粗生産額	耕 種					畜 産				
		米	麦雑類	野 菜	果 実	工芸農作物及びその他	乳肉牛	豚	鶏	その他	養 蚕
平 内 町	2,098	1,350	72	283	6	77	204	39	—	58	—
野 辺 地 町	1,236	353	54	277	0	69	264	180	38	1	—
横 浜 町	2,433	385	436	481	3	29	709	245	16	129	—
東 北 町	7,933	1,446	357	3,123	0	151	2,295	105	439	15	2
六ヶ所村	4,357	542	232	1,089	—	26	2,305	107	49	7	—
計	(100) 18,048	(22.6) 4,076	(6.4) 1,151	(29.1) 5,253	(0) 9	(2.0) 352	(32.0) 5,777	(3.7) 676	(3.0) 542	(1.2) 210	(0) 2

なお加工農産物の生産額は0となっている。麦類には豆、いも類も含む。（ ）内数値は構成比である
第35次青森県農業水産統計年報より

各 論

I 地形分類図

1 地形概説

「野辺地」図幅地域は陸奥湾の南東部に位置し、図幅の西部にわずかに山地がみられるほかは台地が広い面積を占めている。この図幅西部の烏帽子岳山地は隣接の「浅虫」図幅や「青森東部」図幅からつづく新第三系からなる山地で、烏帽子岳（720m）・松倉山（476m）などを中心とした小起伏の山地である。この烏帽子岳山地の山麓部や図幅の東半部には火山灰層に被覆された台地が広くみられ、これらは隣接する「平沼」図幅や「七戸」図幅につづいている。低地としては、図幅中央部を北流する野辺地川沿いと図幅西端部を同じく北流する清水川沿いにあまり広くない谷底平野がみられるほか、図幅東部の陸奥湾沿いに砂丘地がわずかに見られる。

2 地形細説

(1) 地形区

本図幅内の地形は、標高・起伏量・地形面の性質・構成物・地域的まとまりなどから山地（Ⅰa）、台地（Ⅲa～Ⅲb）、低地（Ⅳa～Ⅳc）に大別される。地形区としては次のように区分した。

「山地」	Ⅰa	烏帽子岳山地
「台地」	Ⅲa	野辺地西部台地
	Ⅲb	野辺地東部台地
「低地」	Ⅳa	清水川低地
	Ⅳb	野辺地川低地
	Ⅳc	吹越砂丘地

(2) 地形分類

烏帽子岳山地（Ⅰa）

本図幅の西部に位置する山地で、図幅内では烏帽子岳（720m）が最高峰であるが、この山地は西側に隣接する「浅虫」図幅や「青森東部」図幅につづき、東岳（684m）

野辺地川の谷底平野から東は、野辺地湾岸に分布する吹越砂丘地（IV c）や短小で狭い谷底平野を除けばすべて台地である。この台地は東および南に隣接する「平沼」・「七戸」図幅でもこれに連続して広く分布している。この台地も野辺地西部台地（III a）と同様に、I・II_A・II_B・IIIの4面に区分した。

I面は野辺地町中心街の南東方に広がり、この地形区の過半を占め、この付近の陸奥湾側と太平洋側との分水界になっている。この台地面は東西から刻む込む谷によってかなり開析が進み、平坦面の分布は淋代付近や長者久保付近などに限られている。この面の標高は90～120mであるが、野辺地町に近くなるにつれて標高は40～130mとなり、起伏は大きくなる。したがって、この地形区北部の有戸東方での地形面の傾斜は1°～8°未満であるが、南部の野辺地東方では8°～15°未満の傾斜部分も少なからず分布している。

II_A面は図幅東部のI面周辺に分布し、標高は40～80mである。傾斜は分水界とその周辺や段丘背面では比較的ゆるく、1°～3°未満となっているが3°～8°未満のところもかなりみられる。

II_B面はI面とII_A面の前面、陸奥湾岸に沿って野辺地町の中心街から北東方向に約800～1,200mの幅で連続して帯状に分布している。この面の標高は15～40mであるが、北部に向うにつれて20～50mと高度を増している。この面は北部に向うにつれて砂丘に覆われるが、この砂丘の下部にはIII面が存在する。このことは北に隣接する「陸奥横浜」図幅内でもなかば砂丘に覆われたIII面が認められ、さらに本図幅内の砂丘地の海方前面の海蝕崖の露頭からもIII面の存在が確認されている。この面の傾斜は1/100～1/30未満である。なお、III面は上述の吹越砂丘下部のものを除き、野辺地町の浜町付近にあるもののみを図示した。

この野辺地東部台地は数多くの小河川によって開析されているが、集水域が狭く、その谷底平野も狭く短い。これら谷底平野の傾斜は1/100～1/30未満である。

清水川低地（III a）・野辺地川低地（III b）

図幅の西端に位置する清水川沿いの谷底平野および図幅中央の野辺地川沿いの谷底平野をこのように呼称する。図幅内ではいずれも下流部分きみがあって、上流部分は各隣接図幅にあるが谷底平野は広くはなく、急流の河川がつくる扇状地性の粗大な砂礫質の

・三角岳（753m）・大毛無山（737m）などととも標高のわりには急峻な山容を呈している。この山地を構成する岩石は主として新第三系の緑色凝灰岩類や安山岩類などで、一部には黒色のシルト岩がみられる。

野辺地西部台地（Ⅲ a）

台地の地形区は本図幅の大部分を占めている。図幅中央の野辺地川低地（Ⅳ b）を境にして、その西方では烏帽子岳山地（Ⅰ a）と野辺地湾岸との間に帯状に、東方では地形のほとんどを占めるように広く分布している。これらを野辺地川低地（Ⅳ b）を境にして野辺地西部台地（Ⅲ a）と野辺地東部台地（Ⅲ b）に分けた。

野辺地西部台地は西に隣接する「浅虫」図幅内、南に隣接する「七戸」図幅内でも山地をとりまくように帯状に分布している。この台地には、高位面（Ⅰ面）・中位面（Ⅱ面）・低位面（Ⅲ面）に分けられ、さらに中位面はⅡ_A・Ⅱ_Bの2面に細分される。Ⅰ面およびⅡ_A面は三浦（1967）の口広平段丘を細分したものであり、Ⅱ_B面およびⅢ面は同じく三浦の館野段丘・野辺地段丘にはほぼ相当する。ただし、三浦の口広平段丘はⅢ面に併合した。

高位面のⅠ面は、烏帽子岳山地の東部山麓に付着するように分布しており、面の標高は80～140mであり、南西から北東に3°～8°未満の傾斜で傾いている。

中位面はやや起伏のあるⅡ_A面と起伏の少ないⅡ_B面に分けられる。Ⅱ_A面の標高は40～80mで、Ⅰ面と同様に南西から北東に傾き、傾斜は大部分が1°～3°未満である。上位のⅠ面とは急斜面で境されるところが多い。Ⅱ_B面は狩場沢付近でもっとも広く分布し、その標高は20～50mで、傾斜は1/100～1/30である。

下位面のⅢ面は、中小河川の下部に「旧デルタ」の形態で広く分布するほか、河岸段丘としても分布する。面の標高は5～15mで、わずかに北東方向すわち海岸方向に傾いている。傾斜は1/100～1/30未満である。

なお、この地形区内には、少なからず小河川の狭い谷底平野が分布しているが、その傾斜は堀差川・枇杷野川の上流部分を除けばほとんどが1/100～1/30未満となっている。

野辺地東部台地（Ⅲ b）

構成物よりなる低地となっている。傾斜は野辺地川の最下流部を除けば 1/300～ 1/100 である。

なお、この両低地のほか、野辺地川河口の東西などの段丘と汀線の間には海岸低地がわずかながら分布している。

吹越砂丘地（Ⅲc）

図幅東部の陸奥湾岸に沿って帯状に分布する被覆砂丘からなる砂丘地を、図幅外の地名であるが最もよく砂丘の発達している北の隣接図幅にある地名をとってこのように呼称する。砂丘砂の層厚は数10cmから数mで場所により異なるが、砂丘砂層中には火山灰の薄層が存在することが観察されており、それにより新旧2つの砂丘であることが判る。ここの砂丘は一般に縦列砂丘の形態をとるが、これは台地面を覆うように発達した砂丘が、部分的に凹地をけずりながら風下に延長してできたものである。

砂丘地の最高所は図幅北端付近にある26.2mの三角点であるが、一般的な標高は10～20mである。また砂丘地内の起伏は数mであり、傾斜は1/100～1/30未満である。この砂丘地の海方前面には、谷底平野が汀線と交わるところを除けば、ほとんどが砂丘およびその下部の台地構成層を削って形成された崖高10数mから数mの海蝕崖があり、この海蝕崖と汀線の間には幅のせまい海浜が存在する。

参考文献

活断層研究会（1980）：日本の活断層 東大出版会

建設省計画局地域計画課・国土地理院地図部（1971）：むつ小川原地域大規模開発計画
調査 土地条件調査報告書および 1/2.5万土地条件図

北村 信・岩井武彦・中川久夫（1972）：1/20万青森県地質図および同説明書 青森県

三浦 修（1968）：野辺地付近の海岸段丘 東北地理 20-1

宮内崇裕（1985）：上北平野の段丘と第四紀地殻変動 地理学評論 58-8

水野 裕・堀田報誠（1970）：1/20万地形分類図「青森県」 経済企画庁国土調査課

水野 裕・堀田報誠（1970）：1/5万 「平沼」図幅 土地分類調査（地形分類） 青
森県

水野 裕・堀田報誠（1970）：1/5万 「陸奥横浜」図幅 土地分類調査（地形分類）
青森県

水野 裕・堀田報誠（1983）：1/5万 「青森東部」図幅 土地分類調査（地形分類）
青森県

水野 裕・堀田報誠（1985）：1/5万 「浅虫」図幅 土地分類調査（地形分類） 青
森県

以上

II 表層地質図

1 地質概説

本地域は青森県東部に延びる下北半島の頸部の基部にあたり、西は東北脊梁山脈の北端にある東岳山地の東端、東は太平洋岸に広く発達するいわゆる洪積台地へと続いている。

西部の東岳山地地域は本図幅の南西端に分布している閃緑岩（いわゆる第三紀花崗岩）を取り囲むように新第三系中新統の緑色凝灰岩・硬質頁岩（四ツ沢層）、安山岩熔岩・同質火山砕屑岩（和田川層）および砂岩・シルト岩（甲地層）が発達し、これに流紋岩および石英安山岩が貫入している。

東部の洪積台地地域は、その殆んど大部分は第四系洪積統（主として野辺地層）によって構成されている。これらの洪積統の基盤をなすものは新第三系鮮新統の甲地層で、本図幅東南部の丘陵性台地および東端に発達している谷底部に分布している。また、本地域の台地には新期火山の抛出物であるローム層（火山灰層）が広く発達しており、下位の洪積統および甲知層をおおっている。また、下北半島頸部の野辺地湾沿岸部には、甚だ平坦な海岸段丘が形成されており、そこには細粒砂・細円礫砂からなる段丘堆積物が分布している。さらに同沿岸部の北部には砂丘が形成されており、そこには、かなり熱い砂丘砂永堆積している。

本図幅の西半部（野辺地川以西）に形成されている台地は、東半部のこれらの洪積統とは全く異なった、いわゆる粘土礫（六ヶ所層）によって構成されている。本図幅の野辺地湾岸には海岸平野は殆んど形成されておらず、その大部分は海崖となっている。谷底平野も清水川および野辺地川を除くと、殆んど小規模で、前者では主として砂礫、後者では粘土・砂によって構成されている。

地下資源としては金属鉱床的なものは全く知られていない。しかし、地下水は全域に亘って極めて豊富で、温泉も数ヶ所で開発されている。また、野辺地湾東岸の砂丘地では砂が、丘陵台地部では野辺地層および甲地層の砂などの採掘が行われている。

2 表層地質細説

(1) 未固結堆積物

本図幅における未固結堆積物は沖積低地堆積物の粘土・砂・礫、砂丘砂、段丘堆積物の砂・礫、六ヶ所層の粘土礫および野辺地層の砂・シルトなどである。

粘土・砂・礫 (cs)

本図幅中に発達する各河川の谷底平野に堆積しているもので、清水川および野辺地川では主として礫・砂からなり、他の小河川では粘土・砂によって構成されている。いずれも層厚は薄く、比較的厚い野辺地川でも、その厚さは5m前後である。

砂 (s)

本図幅の北東部の野辺地川沿岸に沿って帯状に長く砂丘が発達している。南部の木明付近では甚だ貧弱なものであるが、北辺へいくに従って、その規模が大きくなり、図幅北端では砂丘の幅は約1.5kmにも及ぶようになる。砂丘の高さも北部ほど高くなり、その標高も20m～25mとなる。全体的に細粒砂よりなり、一部では採砂が行われている。

砂・粘土・礫 (cg)

本図幅西南部の野辺地湾西岸に発達する低位の段丘に堆積しているもので、主として粘土質物からなるが、砂や礫も挟在されている。この段丘の幅は狭く、堆積物の厚さも薄い。馬門部落付近で最も厚く5m前後となっているが、他地区では2m～3m程度である。

砂・礫 (sg)

本図幅の東部、野辺地湾東沿岸部に幅約1kmの甚だ平坦な海岸段丘が形成されており、この段丘は厚さ1.5m前後の砂と細円礫とからなる段丘堆積物とこの上に重なる厚さ1m～2mのローム質火山灰によって構成されている。これらは薄層理および渦巻状層理を示す野辺地層の砂を不整合におおっており、野辺地層とは明瞭に区別される。

粘土礫 (gc : 六ヶ所層)

本図幅西部の野辺地湾西岸部に沿って、幅2km～3kmに及ぶ丘陵性の台地が形成されており、ここには細～大円礫を多量に含む、いわゆる粘土礫が不している。西方では硬質頁岩の細～中円礫が主体となっているが、東方では安山岩の垂円～円形の中～大礫が多くなるが、全体的に硬質頁岩が含まれているのが特徴である。粘土は一部に灰～暗灰色を呈する部分もあるが、全体的に褐色～赤褐色である。これは岩井淳一(1951年)に

よって六ヶ所層と命名されたものである。

(2) 固結堆積物

本図幅の西南部の山地及び東南部丘陵性台地の一部には第三系中新統および鮮新統の堆積岩及び火山岩が広く分布している。固結堆積岩は緑色凝灰岩・硬質頁岩（四ツ沢層）、安山岩質火山砕屑岩（和田川層）および砂岩シルト岩（甲地層）に大別される。

緑色凝灰岩（Yt：四ツ沢層）

本岩は本図幅南西端の山岳地に小規模に点在して分布しており、主として酸性の緑色凝灰岩によって代表される。凝灰岩は一般に淡緑色～淡黄緑色を呈し、一部に凝灰角礫岩を挟在するが、全体的に細粒凝灰岩が主体をなしている。烏帽子岳を構成する流紋岩熔岩にも一部に凝灰岩が挟在しており、本岩と同時期のものと考えられている。

硬質頁岩（Ym：四ツ沢層）

本岩は四ツ沢層の凝灰岩類の下部と上部とに発達するもので、主として黒色～褐色を呈する頁岩からなり、一部に砂質凝灰岩を挟在する。本図幅では南西端にわずかに分布するに過ぎない。

安山岩質火山砕屑岩（Wt：和田川層）

本岩は本図幅の西南部山地の主峰をなす烏帽子岳の北～東部山麓に分布しており、地下では野辺地川左岸まで続いている。本岩は主として安山岩の角礫を大量に含む集塊岩状の火山角礫が主体となっており、しばしば砂質凝灰岩を挟在している。また、一部では水中熔岩の一種であるハイアロクラスタイトも見受けられ、安山岩熔岩と共存する。

砂質凝灰岩（Ws：和田川層）

本岩は前記の安山岩質火山砕屑岩に挟在しているもので、主としてスコリア様の粗粒の砂質凝灰岩からなる。本岩の薄層は各所にみられるが、地質図には比較的厚く分布している部分のみ記入してある。

砂岩・シルト岩（Ks：甲地層）

本岩は新第三系鮮新統の甲地層に属するもので、本図幅では東南部の横沢～淋代一帯の丘陵性の台地および南部の枇杷野川流域に分布している。本岩は主として固結～半固結の砂岩および無層理のシルト岩からなり、しばしば軽石質凝灰岩を挟在する。本岩の凝灰質細粒砂岩およびシルト岩には海綿の骨針が多量に含まれる特徴があり、地層の砂

岩等と容易に区別することができる。なお、本層にはスランピングや層内断層などの2次的堆積構造がしばしばみられる。

(3) 火山性堆積物 (A)

本図幅の丘陵・台地の殆んど大部分はローム質火山灰によっておおわれている。隣接する三沢地区および八戸地では、これらの火山灰は段丘堆積層と火山灰層との累重関係が明瞭であり、火山灰層の区分が容易であるが、本図幅では多少不明瞭となっている。このため、上位段丘に堆積しているローム質火山灰のみを火山性堆積物 (A) として途色し、中位以下の段丘に堆積している火山灰は段丘堆積物と一括して取り扱った。

ローム質火山灰は全体的には1 m～2 m程度の厚さであるが、粘土礫からなる六ヶ所層の分布地域が最も厚く、清水川東部では4 m～5 mに達する。また、野辺地川左岸では軽石堆積物を挟在して3 m～4 mの厚さとなっている。なお、本地域の軽石流堆積物は千曳浮石層と呼ばれている。

(4) 火山性岩石

本図幅中に分布する火山性岩石は閃緑岩、流紋岩、石英安山岩および安山岩である。

閃緑岩 (Di)

本岩は本図幅西南端の山地に分布しており、本岩体は西南方の大和山付近一帯へと続いている。本岩は全般的に岩相変化が著しく、中心部では完晶質であるが周縁部では斑晶質となり、全体的には普通輝石角閃石石英閃緑ひん岩とみなされる。角閃石の一部は緑泥石化され、また緑れん石も認められる。

本岩体は四ツ沢層を貫いていることから四ツ沢層堆積後の貫入と考えられている。

流紋岩 (Ry)

本岩は本図幅の南西部の烏帽子岳を中心に分布しており、四ツ沢層中熔岩と考えられている。本岩は新鮮な部分は淡青色を呈するが一般には灰褐色ないし灰白色を呈する。一般に塊状緻密であるが、岩体の周辺部では破碎質となり見掛け上凝灰角礫岩様となる。また、全体的に変質が著しく初生鉱物や組織などは不明瞭である。一部で柱状節理がみられる。

石英安山岩 (Da)

本岩は馬門温泉西部および西南端の山岳地に分布しており、前者は和田川層への貫入岩として、後者は四ツ沢層の熔岩と考えられる。本岩は帯緑灰色斑状の角閃石石英安山岩で、角閃石は緑泥石となっている。また、変質が著しく、変質鉱物としては珪化作用の石英が多く、鉍化変質の黄鉄鉍や絹雲母等が認められる。

安山岩 (An)

本岩は本図幅の西部山地に数多く散在して分布しており、四ツ沢層中の貫入岩および和田川層の熔岩、貫入岩として産出している。和田川層中の本岩は暗黒色斑状の普通輝石紫蘇輝石安山岩で填間状組織を示すものである。

表層地質分類と開発および保全との関係

(1) 風化殻および地質災害

本図幅中に分布している地層は野辺地川を挟んで東西で岩種構成が全く異なっており、東部は、いわゆる洪積台地で、西部は第三系中新統からなる山地となっている。

東部の洪積台地は、一部を除く殆んど大部分はローム質火山灰によっておおわれており、このため本地域の風化状態はほぼ一様である。ローム質火山灰は粘土化しているが、そのN値は5前後を示し、比較的安定している。野辺地川北部の横沢～淋代付近の丘陵性の台地部には鮮新統の甲地層が分布しており、その一部には崖錐堆積物がみられ、路崖部で小崩壊が生じている。しかし、表土も薄く、風化も崖錐部以外はあまり進んでいない。

西部の山地は四ツ沢層、和田川層およびこれを貫く閃緑岩、流紋岩、石英安山岩、安山岩等から構成されている。

これらの地層・岩石は比較的風化帯は浅く安定した地形を示している。しかし、四ツ沢層の凝灰岩や流紋岩・石英安山岩の一部で、鉍化作用や粘土化帯がみられ、石英安山岩にはマサ状の風化帯が形成されている部分もある。

本図幅中で地質災害が生じた記録はないようである。しかし、野辺地湾の東部沿岸部は大規模な海岸侵食が行われている。過去の記録は残されていないが、この数10年の間に数10m以上の海岸侵食が行われたようである。現在は殆んど全沿岸に護岸工事およびテトラポットの投入が行われ海岸侵食は進んでいない。この海岸侵食が行われた原因は不明であるが、沿岸部の土地が上昇しているようであり（5万分の1地形図の水準点の標高が古い地図と新しい地図とでは、かなり異なっている）、注目される。

本図幅中には野辺地層および甲地層の砂を対象とした土取場が数ヶ所あり、そこでは急崖の状態となっていることから、その崩壊が懸念され、土地保全の対策が必要であるように思われる。

(2) 温泉

本図幅中には古くから自然湧出のまかど温泉があったが、近年深いボーリングによって温泉が開発され、現在では7ヶ所に温泉が誕生した。しかし、いずれも泉温が41℃以

下で昇温しなければ浴用に利用することはできないものである。泉質はまかど温泉を除くと単純泉的なものである。

付表 温泉源一覧表

	深度 (m)	泉温 (°C)	湧出量 (ℓ/分)	泉 質	掘さく年月
1 まかど温泉	自然湧出	37	99	含石膏硫化水素泉	—
2 馬門鳥井平泉	685	38	100	—	昭. 45. 7
3 むつ湾温泉	500	37	100	単純泉	昭. 45. 11
4 馬門道泉	450	32. 5	667	アルカリ性単純泉	昭. 49. 11
5 有戸鳥井平泉	910	40. 5	500	—	昭. 50. 4
6 野辺地温泉	578	18. 6	580	弱放射能	昭. 55. 11
7 雁の湯温泉	900	26. 5	13	—	昭. 59. 11

(3) 地下水

本図幅の地質は、前記のように野辺地川の東西で著しく異なっている。従って地下水もまた全く異なった包蔵状態を示している。

野辺地川の西部地域では馬門部落付近に比較的浅所に豊富な自噴性の地下水が賦存している（深度50～80m、口径6吋で約1,200m³/日の自噴）が、多少臭気を帯び水質的に良好なものでない。批把野から馬門スキ--場に至る一帯では和田川層の安山岩質集塊岩中から良質の地下水が開発されている（深度150m～300m、口径6吋～8吋、揚水量1,000m³/日～1,500m³/日、水温13°C）

野辺地川の谷底平野および下清水目付近は青森県屈指の良質な水が多量に自噴する地区であり、中屋敷にある野辺地町上水道水源井では深度200m、口径8吋井から3,600m³/日～4,010m³（17°C）の自噴をみ、一の渡の4吋井では70mの掘さくで約2,000m³/日の良質水（15°C）が自噴している。

東北部の丘陵、台地地域でも学校用水、農業用水および簡易水道用井が数多く掘さくされており、地区によって多少の相違はあるが、平均的には深度150m～200m、口径

4 吋～6 吋井で約 150 m^3 ／日～ 300 m^3 の採水が行われている。淋代小・中学校井では深度 365m, 口径 6 吋, 揚水量 288 m^3 ／日, 水温16.5℃となっている。これらの地下水は野辺地層および甲地層中の地下水を採取している。

参考文献

- 岩井淳一（1969）：青森県東部の更新統，東北大学地質学古生物学教室邦文報告，No.40，
P. 1～31.
- 岩井武彦，酒井軍治郎（1970）：1／20万表層地質図「青森県」，経済企画庁
- 岩井武彦（1981）：青森県地域別地下水概況，青森県企画部
- 北村 信，岩井武彦，多田元彦（1972）：青森県の地質，青森県
- 金属鉱業事業団（1976）：広域調査報告書「八甲田地域」，通産省・資源エネルギー庁
- 宮内崇裕（1985）：上北平野の段丘と第四紀地殻変動，地理学評論，58－8.
- 日本国有鉄道（1981）：八甲田北部地質図（5万分の1），盛岡工事局.
- 柴崎達雄他4名（1957）：青森県下北半島南部の地質と地下水，藤本治義教授還暦記念
論文集，P.154～160.

III 土 壤 図

1 土壤分類の細説

(1) 山地および丘陵地の土壤

本図幅の山地および丘陵地は図幅中央を縦貫する野辺地川の西方に展開しており、南西部に位置する最高烏帽子岳（719.6m）から、西は堀差川を経て陸奥湾に、東は野辺地川へ、北は野辺地湾へと、それぞれ山岳地帯から枝丘を含んだ丘陵地へと展開している。

烏帽子岳山頂部付近にはポドゾル土壤の分布がみられ、頂部の乾性土壤を囲むように湿性ポドゾルの分布がみられる。この地帯の下部海拔高ほぼ 100m から 500m にかけては、主として褐色森林土壤が出現分布しているが、この地帯のうち海拔高 100m から 200m にかけてはB 層が赤褐色を呈する赤褐系の土壤が出現している。また褐色森林土壤の分布域で、現在ヒバ（ヒノキアスナロ）林であるところや、以前ヒバ林であったところには乾性のポドゾル土壤が出現していることが特徴的である。また沢筋上流には小面積で残積性未熟土壤が分布する。これら山岳地に続く丘陵地末端には淡色黒ボク土壤が分布し、台地への接続しているが、これの解説については台地および低地の土壤の項に記載する。

1) 残積性未熟土壤

① 赤沢統 (AkS)

河床勾配の緩やかな部分に、砂（礫）や粘土が堆積したもので、水湿に富み、養分的にも豊富なので、樹木の生育は良好である。

2) 乾性褐色樹林土壤

② 高地山統 (Tkt)

尾根筋から尾根の突出部分に出現し、腐植層が薄く、半角礫を介在することが多く、生産力は低い土壤である。全て林地として利用されている。

3) 乾性褐色森林土壌 (赤褐色)

③ 横沢統 (yoz)

低海拔地帯の中腹から尾根筋に出現する土壌で、一般的にA層は薄く重粘で、赤褐色を帯びたB層をもつものが普通である。一部台地頂部に出現するものも含めて本統とした。殆ど林地として利用されている。

4) 褐色森林土壌

④ 西ノ沢統 (Ns)

緩斜地や斜面中腹に広く分布する土壌で、A層からB層にかけて塊状構造をもつものが多く、生産力は中庸である。殆ど林地として利用されている。

5) 湿性褐色森林土壌

⑤ 西股沢統 (Nmz)

山地の沢沿いや沢頭、崖錐等に出現する土壌で、深くまで腐植が流入し、理学性の良好なものの生産力は高い。全て林地として利用されている。

6) 乾性ポドゾル化土壌

⑥ 貴船川統 (Kf)

烏帽子岳頂上や山地帯のヒバ林下及びヒバ林跡地に出現している。暗銹色を帯びた集積層(B₁層)と、その上部の溶脱層(A₂層)が特徴的な乾性の土壌である。主として林地として利用されている。

7) 乾性ポドゾル化土壌

⑦ 烏帽子岳統 (Ebd)

黒褐色のA₁層下部には灰色を帯びた部分がA₂層に団塊状にみられる場合が多く、暗銹色の集積層へと変異する湿性の土壌で、B層上部は腐植によって汚染されているのが普通である。このタイプに分類して図示した中には、局部的に出現している暗色系の褐色森林土壌も包含している。

(2) 台地および低地の土壌

本図幅中、山地および丘陵地は図幅西南部の烏帽子岳周辺に存在するのみで、その他は総べて台地および低地土壌である。

陸奥湾西部沿岸から低い砂礫台地が分布し標高につれて次第に高い砂礫台地へと移行し丘陵地、山地へと接続している。この西部地域には砂丘未熟土は発達せず低い台地上では主として黒ボク土壌が分布するが、開植や開田などによる淡色黒ボク土も多い。更に標高の高い台地上には主として淡色黒ボク土壌が分布し、丘陵地、山地に接している。土地利用としては林地、畑地、牧野、一部開田地として利用されている。これら台地間を小河川が解析して狭小な谷底平野や侵食谷を形成し、多湿黒ボク土壌、黒ボクグライ土壌、灰色低地土、グライ土などを形成し、主として水田として利用されている。

一方陸奥湾東部地域では海岸線に沿って砂丘未熟土が分布し、続いて低い台地から次第に高い台地へと移行し、最高 120m前後に達する。土壌は黒ボク土壌、淡色黒ボク土壌が分布する。土地利用としては林地、畑地、牧野などに利用されている。これら台地間を小河川が解析し、狭小な谷底平野や侵食谷を形成し、グライ土、泥炭土壌が分布し、主として水田となっており、またそれらの末端には狭小な黒泥土壌が分布し、林地となっている。

1) 砂丘未熟土壌

⑧ 猿ヶ森 3 統 (Srg-3)

陸奥湾の東部海岸線に沿って堆積する砂丘土壌で、表層は植生による腐植を含む。主として防風林地として利用されているが、一部草地や荒地となっているところも多く、生産力は低い。

2) 厚層黒ボク土壌

⑨ 菩提寺統 (Bdi)

本図幅では東端の台地上に小面積で分布する。ローム質土壌上に多腐植質土壌が厚く堆積している。生産力は高く、主として草地として利用されているが、荒地もみられる。

3) 黒ボク土壌

⑩ 有戸川-a 統 (Arg-a)

台地縁辺や凸部等にみられ。褪色した黒色土層をもつ乾性又は偏乾性の土壌で、表層近くには粒状構をもつものが多い。林地、草地、普通畑地として利用されているが荒地もみられる。草地、畑地の場合は表層のF-H 層を欠く。生産力はそれ程高くない。

⑪ 有戸川-b 統 (Arg-b)

台地上の平坦面や緩斜地に広く分布しており、黒色土層が厚く、密な堆積をしている場合が多い。面積的には黒ボク土壌中最も広く、林地、草地、普通畑に利用されている。適潤性の土壌であるか、生産力はそれ程高くない。

⑫ 有戸川-c 統 (Arg-c)

沢状地や台地内の凹地にみられる湿性の黒ボク土壌で黒色土層が厚い。斜面下部や沢頭状地のもので理学的の良好なものの生産力が高いが、平坦面の凹地等に見られる堆積が密で通気性の悪いものの生産力は低い。主として林地として利用されている。

⑬ 藤沢統 (Fuz)

本土壌統は陸奥湾西側海岸の台地上に広く分布する。表層は腐植質の黒ボク土壌に厚く覆われ、下層は褐色のローム質土壌である。適潤性黒ボク土壌で、地力保全上も特に問題はなく生産力が高い。林地、草地、普通畑等に利用されている。

⑭ 藤沢-c 統 (Fuz-c)

本図幅西側の台地を切るように走る沢筋に出現し、藤沢統に接している。本来藤沢統に類似するが、地形的に湿性となっているので区別した。腐植層が厚く生産力が高いが小面積である。主として林地として利用されている。

⑮ 横浜統 (Ykh)

陸奥湾東側の砂丘に接した台地上にわずかに分布する。本来有戸川統に類似するが、表土が開畑等何らかの人的作為が加えられており、主として普通畑、草地として利用されているので区分した。ローム質土壌の上に腐植質黒ボク土壌を厚くのせており、生産力が高い。

⑯ 三沢統 (M)

本図幅東南端の台地上に分布する。黄褐～明褐中粒質土壌の上に腐植質黒ボク土壌を厚くのせている。本統も表土に人的作為が加えられており、主として普通畑、草地として利用されている。過乾になり易く、生産力はそれ程高くない。

⑰ 二又統 (Ftm)

台地上野狭小な侵食谷ぞいに細長く分布する。表土は腐植質黒ボク土で、下層は出現位置により異なる。斑鉄を含み酸化的である。主として水田として利用されているが、荒地も多い。生産力はそれ程高くはない。

4) 黒ボクグライ土壤

⑱ 清水川統 (Smg)

小河川下流域、台地上野狭い侵食谷上に分布する。表土は腐植質黒ボク土に覆われ、下層は地形により異なる。グライ斑、グライ層が出現し、斑鉄は発達していない。生産力はやや高く、水田として利用されている。

⑲ 一ノ渡統 (Ich)

本質的には清水川統に類似するが、グライ度が強く、下層にグライ化された礫層を有する。斑鉄は発達せず、生産力は高くない。水田として利用されている。

5) 淡色黒ボク土壤

⑳ 有畑統 (Arh)

本図幅東部側の開析された台地上に分布する。また一部黒ボク土壤が開畑等による人工的作為によって表土の黒ボク層厚が薄くなったものも本統とした。褐色ローム質土壤の上に薄い黒ボク土壤をのせている。主として林地、草地として利用されているが、生産力はそれ程高くはない。

㉑ 野辺地統 (Nhj)

陸奥湾東側の砂丘地に接した低い台地上に分布する。人工的作為が大きい土壤である。円礫を含む黄褐色ローム質土壤の上に薄い黒ボク土壤をのせている。主として草地、普通畑、また一部開田地などもみられる。生産力は高くない。

㉒ 馬門統 (Mkd)

陸奥湾西側の丘陵地に接する台地上に広く分布する。黄褐色の中粒質土壤の上に薄い黒ボク土壤をのせている。人工的作為の度合も大きく、草地、普通畑、人工林等に利用されているが、生産力はそれ程高くはない。

6) 細粒灰色低地土壤

㊸ 老部川統 (Oip)

地区西側の清水川下流の谷底平野に分布する。灰褐色の粘質土壤で、斑鉄に富み生産力が高い。水田として利用されている。

7) 粗粒灰色低地土壤

㊹ 脇野沢統 (Ws)

本統も清水川中下流の狭小な谷底平野や侵食、谷等に分布する。砂礫層の上に薄い灰褐色の中粒質土壤をのせ、斑鉄に富み、盤層を作る場合も多い。有効土層薄く生産力が高くない。水田として利用されている。

8) 細粒グライ土壤

㊺ 細津統 (Hst)

狭小な谷底平野や侵食谷等に小面積で分布する。粘質～強粘質の強グライ土壤である。表土は黒ボクの影響を強く受けており、排水不良の土壤で斑鉄は余り発達していない。水田として利用されているが、荒地も多い。生産力は低い。

9) 粗粒グライ土壤

㊻ 鶴ヶ崎統 (Trg)

山間の狭小な侵食谷等に小面積で分布する。粗粒質のグライ化土壤の上に薄い黒ボク土壤をのせている。強グライ土壤で、斑鉄は発達せず、排水不良の低生産性土壤である。水田として利用されているが、荒地化したものも多い。

10) 低位泥炭土壤

㊼ 戸鎖統 (Tks)

侵食谷末端に狭小な面積で分布する。低位泥炭の厚さ50cm以上で、その上に黒ボク土をのせている。作土直下よりグライ層で、斑鉄は発達しない。水田として利用されているが荒地化したものも多い。排水不良の低生産性土壤である。

㊽ 保戸沢統 (Hoz)

狭小な谷底平野，侵食谷等に分布する。土壤は戸鎖統に類似するが，泥炭層の厚さがやや薄く，戸鎖統よりは酸化性的である。

11) 黒泥土壤

㊸ 新田統 (Shd)

台地の沢沿い，平坦地にみられるもので，黒泥状の土層の下には未分解の植物遺体が認められるものが普通で，生産力は極めて低い。主として林地として利用されている。

松 尾 弘 (青森営林局盛岡営林署)

岩 村 良 男 (青森県林業試験場)

相 馬 駛 春 (青森県農業試験場)

鎌 田 健 造 (")

IV 土地利用現況図

1. 農用地

5市町村の土地利用のうち耕地面積は15,191haで全体の17%を占めておりその地目別割合は普通畑36%, 水田32%, 牧草地32%となっている。

1) 水田

水田面積は、5市町村で4,515haであるが、減反政策による休耕等により作付け面積は本地面積の28%減となっている。

図幅内水田のは場整備は清水川水域に234ha、野辺地川、有戸川水域の110ha程度事業が行われたほか狭小な谷低地に沿う沢田が列状をなし、その多くは休耕により現況原野となっている。

第8表 町村別水田状況

(単位 ha)

区分 市町村	田(本地)	水 作 付 面 積	稲 収 量 kg	10a 当 た り 量	生 産 調 整 実 績	備 考
平内町	(1,510) 1,400	(948) 1,080	(518) 456	(589) 355	()	()は昭和45年青森農林水産統計年報(第18次)による
野辺地町	(412) 396	(258) 280	(503) 446	(134) 122	()	昭和62年青森農林水産統計年報(第35次)による
横浜町	(486) 486	(261) 322	(510) 425	(330) 181	()	・昭和45年生産調整実績() については、転作と休耕等 を含む面積
東北町	(1,250) 1,470	(791) 1,030	(540) 496	(684) 526	()	・昭和62年生産調整実績は転 作面積
六ヶ所村	(1,440) 763	(808) 542	(440) 358	(649) 417	()	・県水田対策課資料による
計	(5,098) 4,515	(3,066) 3,254	(501) 448	(2,386) 1,601	()	
青森県	(92,000) 86,900	(76,800) 68,800	(573) 582	(16,062) 22,995	()	

[生産調整面積は属人等によるため作付面積+生産調整実績=田(本地)とはならない。横浜町、東北町、六ヶ所村については隣接する「平沼」図幅(昭和45年度)に関連する]

2) 普通畑

本図幅内の関連町村の畑は陸奥湾沿いの台地に展開し、主な作物は市場性の高い換金性作物長いも、大根、ニンジン、ゴボウなどを生産しており県内でも有数の畑作野菜地帯となっている。これらの畑作物は関東を中心に全国規模で出荷されているが、特に東北町の長いもの出荷量は全国市場の3割以上を占め水稻を抑え当町の大黒柱的作物となっている。

3) 草地（人口草地）

図幅内関連5町村の人口草地は県内人口草地面積の27%を占め、その殆どが横浜町、東北町、六ヶ所村の台地に展開されている。この地域には町村営による牧場が多くあるほか野辺地町には県畜産試験場、横浜町には県肉用牛開発公社があるなど酪農経営の拠点ともなっている。

3) 林地

図幅内関連5町村の林地の占める割合は、それぞれの町村面積のおよそ70%前後と平均している。

植生状況は本図幅西部下方に存する上河渡頭（590m）鳥帽子岳（720m）の山頂部から「七戸」図幅にかけて天然広葉樹チシマザサープナ群落に覆われ、その山麓東側には天然広葉樹ヒノキアスナロ群落がみられる。

また、本図幅東部側から「平沼」図幅にかけては、東部側と西部側にはみられない人工針葉樹クロマツ、天然広葉樹カシワが群落をなし、さらに陸奥湾沿いにハマナス群落をなし植生している。

人工針葉樹林と天然広葉樹の割合は6：4と人工針葉樹林が多くその5割以上がスギで本図幅東部上方外に散在している。

3) 市街地村落

本図幅中心部に位置する野辺地町は、古くから交通の要所として栄え、明治初期までの200年間は大阪、函館などと盛んに交易し、東北有数の商港として繁栄した歴史がある。現在その面影をみることができないが、町並み国道279号線の始点部を核として県道馬門野辺地線沿いに形成されている。

平内町の市街地は東西に走る国道4号線およびJR東北本線に沿って形成されており、さらに県立夏泊自然公園の環状線沿いに集落が点在している。

また、本図幅上方に位置する横浜町は町を縦貫する国道 279号線（はまなすライン）沿いに町並みが形成されている。

4) その他

5 町村の土地利用の形態別面積と土地利用の規制区域指定面積は、第Ⅳ－1 表および第Ⅳ－2 のとおりである。

佐藤春夫（青森県農林部土地改良第一課）

第IV-1表 土地利用の概要

(単位: ha)

区分 市町村	総面積 km ²	耕地計	耕地内訳				宅地	山林		その他
			田	畑	草地	樹園地		国有林	民有林	
平内町	215.98	1,951	1,510	321	105	15	219	4,490	12,581	2,357
野辺地町	82.66	1,003	426	295	280	2	256	2,032	4,339	636
横浜町	125.83	2,654	525	907	1,220	2	147	5,182	3,799	801
東北町	209.72	5,714	1,590	2,550	1,560	14	257	6,199	7,618	1,184
六ヶ所村	253.35	3,869	819	1,320	1,730	—	518	8,598	8,548	3,802
計	887.54	15,191	4,870	5,393	4,895	33	1,397	26,501	36,885	8,780

資料: 耕地及び山林について、青森農林水産統計年報第35次より、
宅地については、固定資産価格概要調書(昭和63年度)より。

第IV-2表 土地利用の規制区域指定

(単位: ha)

区分 市町村	市町村 面積 km ²	都市計 画区域	市街化 区域	市街化 調整区域	農業振 興区域	農用地 区域	保安林 面積	自然公 園面積
平内町	215.98	4,540	—	—	10,598	2,246	2,627	—
野辺地町	82.66	1,570	—	—	4,950	844	512	—
横浜町	125.83	—	—	—	7,384	2,901	359	—
東北町	209.72	7,216	—	—	14,620	4,629	631	—
六ヶ所村	253.35	19,010	4,856	—	10,218	4,256	603	—
計	887.54	32,336	4,856	—	47,770	14,876	4,782	—

資料: 都市計画区域は、青森県の土地利用元年3月
農業振興区域は、農業振興地域整備計画総覧63年3月
保安林、公園は青森県の林業63年度版

1990年3月 印刷発行

土地分類基本調査

野辺地

編集発行 青森県農林部土地改良第一課
青森市長島1丁目1番1号

印刷 (地図・説明書)
昇寿チャート株式会社
東京都台東区台東2丁目27番9号